

landschaft #7

- 場所と景観、landschaftシリーズの制作から -

landschaft #7

- place and landscape, from landscape series -

映像メディア学科・助教

Department of Visual Media・Assistant Professor

村上 将城 Masakuni MURAKAMI

はじめに

本作品は2010年から岐阜県美濃加茂市で行われているアートプロジェクト「きそがわ日和」の川と町アートプロジェクト夏秋2012の中で展示を行ったものであり、その制作過程も含めた報告とする。

1 landschaftシリーズ

“landschaft”シリーズは2006年から制作を続けており、本作品で7作目となる。このシリーズでは、日本に於ける一般的な「風景」という概念に収まらない「景観 - 人間の視覚によってとらえられる認識像 -」をどのように眺め、切り撮り、見せることができるのかを模索しながら制作を続けている。そのため、タイトルは「風景」だけでなく「景観」など広義な意味を含むドイツ語の“landschaft”を用いている。

2 制作

2.1 制作プロセス

制作は以下のプロセスで行った。

- 1) 展示 / 制作を行う美濃加茂という場所のリサーチ作業
- 2) 上記リサーチを踏まえたフィールドワーク
- 3) 撮影
- 4) 展示

まずは制作 / 展示場所となる、美濃加茂という「場所」の成り立ち及び歴史のリサーチを行い、どのようにアプローチ（撮影）していくのかを検討していった。

2.2 美濃加茂の成り立ち

美濃加茂は奥美濃から続く山並と濃尾平野に接しており、双方の間には木曽川が流れる。陸地にはかつて中山道が通り、太田には宿場町「太田宿」が栄え、古くから東西の文化が交わる場所となった。川はその道程となる対岸をつなぐ要所であると共に、上流から木材などを運搬する重要な交通路でもあった。つまり、古くから山、川、陸の中継 / 交流点であり、それぞれの境界に位置する場所でもある。



写真1:「landscape #7」より、2012年
Pigment Print、341mm×227mm



写真2:「landscape #7」より、2012年
Pigment Print、341mm×227mm

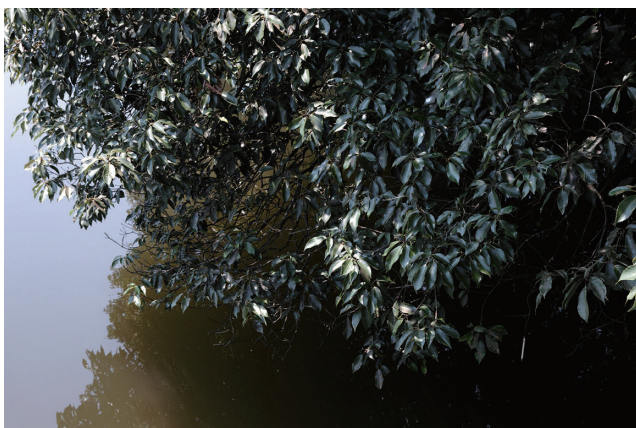


写真3:「landscape #7」より、2012年
Pigment Print、728mm×490mm



写真4:「landscape #7」より、2012年
Pigment Print、728mm×490mm

2.3 撮影

撮影地は2.2に記した特徴を踏まえ、様々なものの境界でもあり交流点となる山と平野の境、そして川(木曽川)を主として進めた。美濃加茂市史によると、山と平野の境ではかつて、山の民と平野の民が互いの領地の境を巡る争いがあったと言う。その境を歩いて撮影のポイントを探り、山へ分け入っていくその入口(写真1,2)、麓の田や畑へ水を供給するための溜池(防火用としての役割も兼ねていると思われる)へと絞り込んでいった。この溜池のイメージでは水への反射を写真のネガ / ポジを想起させる効果も狙っている。(写真3,4)

川での撮影は、下米田町に住む佐合氏にお願いしてボートに乗せてもらい、木曽川と飛田川が合流する川の中腹地点から下流にある今渡発電所と今渡ダムを含む景観を。(写真11) そこから木曽川を上流に上がった河岸にある、亜炭坑跡を撮影した。美濃加茂から御嵩にかけては、明治から昭和20年代前半までの間、日本で有数の亜炭坑として栄えていた。かつては水位が低く、河岸にある亜炭坑跡まで河原に降りて見ることが出来たが、1939年に建設された今渡ダムの水位調節により河原は水で埋まり、両岸は木々に覆われ、崖になっているため現在は川の中腹からしかその跡を見ることができない。(写真5)



写真5:「landscape #7」より、2012年
Pigment Print、341mm×227mm



写真6:「landschaft #7」より、2012年
Installation View



写真7:「landschaft #7」より、2012年
Installation View

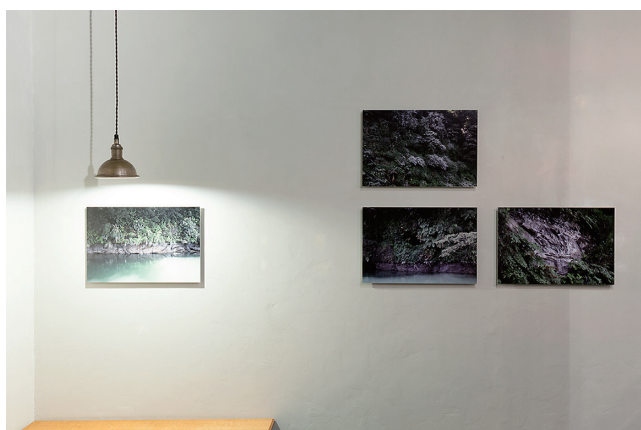


写真8:「landschaft #7」より、2012年
Installation View

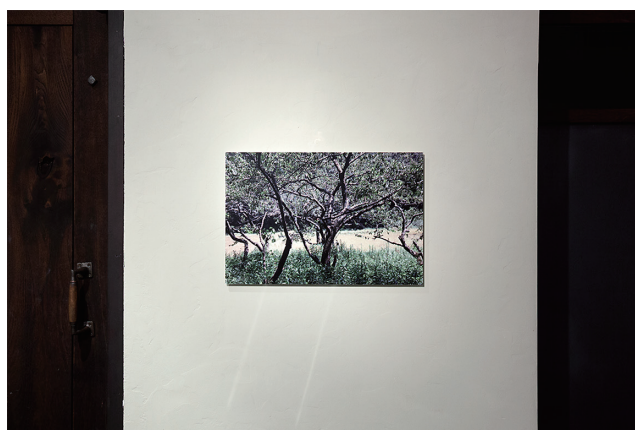


写真9:「landschaft #7」より、2012年
Installation View

2.4 展示

展示場所がカフェスペースの壁面であったため、客席に座った状態でも、立って眺めても視界を遮らないよう、また作品が場と共存出来るようサイズ、高さなどの配置を決定した。同時に、入口から最後のイメージまで私が辿った足並順に配置している。それは擬似的に私の道程を体感できるようにするためでもある。こうした流れを持続させるため、額装は行わずフレームや余白などを排除し、全てのイメージは裁ち落としとした。仕上は写真をアルミ複合板にマウントしているが、平面性を出すのと同時に裏面にゲタを取り付けることで壁面から作品を浮かし、壁と同化しないことも目的としている。(写真6,7,8,9)

展示に訪れた地元の方々から「美濃加茂を散歩しているようだ」という感想を聞いた。木漏れ日が射す山中の、落ち葉を踏みしめる音が聞こえる、と。これは私にとっての最上の褒め言葉であった。

最後に

今回制作した「landschaft #7」では冒頭に述べた風景 / 景観へのアプローチだけでなく、普段私が作品で扱うことの多い境界や痕跡といった要素を盛り込んでいる。それぞれの「場所」が持つ地理的な特徴だけでなく、かつてからの、人の営みによる集散的な記憶を炙り出すこと。それらは一時的ではあるが、決して消え去ることはない。同時に、時代は変われど今も変わらずそこに在るもの。写真機はこれらを克明に記録する。今後も、こうした場所やメディアが持つ特性と併せて風景 / 景観と対峙し、表現の可能性を模索していきたい。

最後に、本作品を制作する上で協力頂いた皆様に簡単ではありますが、ここにお礼申し上げます。

参考文献

- [1] 美濃加茂市、美濃加茂市史 通史編、1980年
- [2] 美濃加茂市、美濃加茂市史 民族編、1978年



写真10:「landschaft #7」より、2012年
Pigment Print、728mm×490mm



写真11:「landschaft #7」より、2012年
Pigment Print、728mm×490mm